

コミュニティ・ビルディング

住民力を高め、ともに支え合う地域をつくる



ファシリ
テーター

稲垣文彦氏
（公益社団法人中越防災安全推進機構
復興デザインセンター長 新潟県長岡市）

登壇者

吉田和子氏
（りくカフェ代表、岩手県陸前高田市）

橋本大吾氏
（一般社団法人りづらす代表理事、宮城県石巻市）

アンジェラ・オルティス氏
（一般社団法人 OGA FOR AID、宮城県南三陸町）

プレゼンテーション概要

- 吉田** 東京出身だが、陸前高田に 33 年前に歯医者を開業するために夫と移住。震災後、何もなくなってしまったため、人々は家から出なくなった。吉田の自宅に集まった支援物資を見て、東京大学の小泉教授が、お茶を飲めるようなコミュニティスペースが必要と助言した。ジャパン・ソサエティーと住友林業の支援を得て、2012 年 1 月、「りくカフェ」を仮設オープン。2014 年 10 月には本設オープン。カフェでは健康に気を遣った食事を提供。健康づくりへのきっかけづくりをしたい。野菜は近所のおばちゃんから頂いたものを使用。「こういうカフェをやりたいのか？」と聞かれると、「やることになってしまった」というところ。「アクシデントなアントレプレナー」である。
- 橋本** 理念は子どもから大人まで障害の有無にかかわらず誰でも自由に創造できるようにすること。石巻住民は自立意識が強いが、サポートは必要である。「デイサービス」と「健康サポーター」が活動の柱。19～29 歳の障害者のコミュニティ実習（職場実習）などを展開。障害者は若くても就業が困難。また要介護の高齢者に、三カ月以上自社のサービスを使ってもらおうと、77% に改善が見られた。自分たちで改善に向えるようなサポートをしていくべきだと考えている。住民の住民による健康づくりコミュニティの創造が理想。苦勞としては、行政と社会福祉協議会とで、関わり方が異なることなど。
- オルティス** 震災翌日、友人を心配して南三陸を訪問したのをきっかけに、家族や友人たちとともに OGA を設立。緊急支援から始まり、多国籍なボランティアを集め、地元の耕作放棄地の有効活用や農産物の加工食品化、コミュニティ・ラーニングセンターでの多文化教育などを行ってきた。災害が起きると、社会問題が加速される。震災後、「何をしたらいいかわからない」という人が増えたので、まず何か行動をできるようにするためのという活動をしたかった。支援されるのではなく、何か役割を持たせることでやりがいを与えるということ。支援の理想と現状に大きな隔たりがあることが一番の問題だと考えている。

ディスカッションより

- 震災後、活動をして何か変わったかといえば、毎日がより充実した。人とつながる充実感を得た。（吉田）
- 障害者との関わり方や子どもへの関わり方を学んだ。（橋本）
- 人を勇気づけようと支援をしたら、自分たちも元気をもらった。お互いに元気づけられる関係を持続的にしたい。（オルティス）
- （3 人の話を聞いて）私は名刺で社会とつながっていたと実感。（稲垣）
- 淡路大震災でボランティアをしようと思ったが、何もできなかったという経験がある。コミュニティをつくるために人を集めるためには何が必要か。（参加者）
- 物資は足りている、家もできてきているので、とりあえず居続ける。継続し続けること。10 年後に南三陸はどうなるのか、まだ住み続けられるのか。彼らがそこに居続けられるサポートをしていきたい。（オルティス）
- これから住民の力を強くしていきたい。健康を知るきっかけづくりを広く続けていく。何かしたいけどどうしよう、と、機会を求めている人にしっかり届くように。（橋本）
- まずは「りくカフェ」に来てほしい。遠いし、まだまちはできていない。みなさんにこれからの街づくりを見てほしい。（吉田）
- 「あなたに関心を持っている」、「承認している」。そう言うことが効果あるのかもしれない。（稲垣）
- 本日は高いレベルの話を聞くことができた。自立心が強いけど、どこかに遠慮する東北人。自然体が一番なのかもしれない。（稲垣）